

目的

那珂川のアユ資源動向を把握し適正な漁場運営に寄与するため、アユの遡上状況および放流状況を調査した。

材料および方法

**アユの遡上状況** 茂木町大藤（河口より51 km）および大畑（同55 km）の2地点において平成30年3月1日から6月30日の間、毎日の遡上状況について現地調査員が観察・記録したデータを収集した。観察の時間や回数による影響を除くため、同日に観察された遡上群は地点ごとにまとめて1群とした。両地点で観察された群数の合計を遡上群数とした。遡上群は団子状と帯状に大別され、両群間で遡上尾数に差があると考えられることから、換算遡上群数（ $1.8 \times \text{帯状の群数} + \text{団子状の群数}$ ）に変換して集計した後、平年値（平成元年から平成29年までの平均値）と比較した。初遡上日については、現地調査員やその他漁協組合員等により当场へ寄せられた情報をもとに、水試職員が直接採捕を行って確認した。

**関連環境情報** 那珂川においてアユの産卵・仔魚の降下に影響を与える河川流量<sup>2)</sup>および稚魚の成育に影響を与える河口付近の海水温<sup>3)</sup>については、国土交通省常陸河川国道事務所が茨城県常陸大宮市野口で観測している流量データおよび茨城県水産試験場が公表している「那珂湊定置水温」を使用した。

**アユの放流状況** 那珂川で放流事業を行っている栃木県那珂川漁業協同組合連合会会員の那珂川北部漁協、那珂川南部漁協、那珂川中央漁協および茂木町漁協の放流実績を集計した。

結果および考察

**アユの遡上状況** 今年度の初遡上確認日は3月30日で、平年の4月6日より7日早く、前年よりも8日遅かった（図1）。なお、遡上群は4月22日に茂木地区で初めて確認され、5月中旬および6月上旬にピークを迎えた（図2）。遡上日誌から算出された換算遡上群数は85.0群で、前年（80.0群）および平年（58.3群）より多かった（図3）。

**関連環境情報** 遡上前年の秋の河川流量については、10月下旬に出水が確認された（図4）。アユの遡上

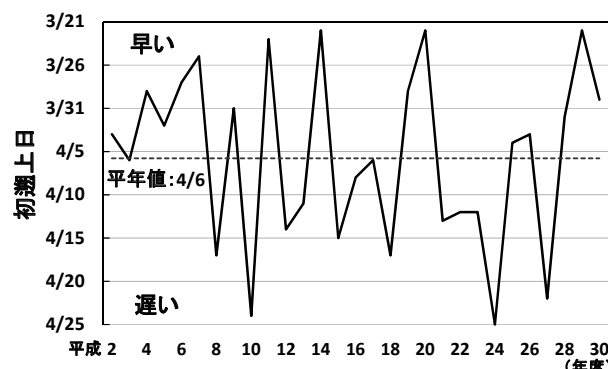


図1 初遡上日の推移

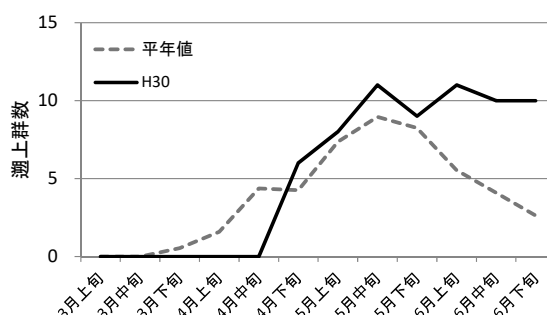


図2 換算遡上群数の経時変化

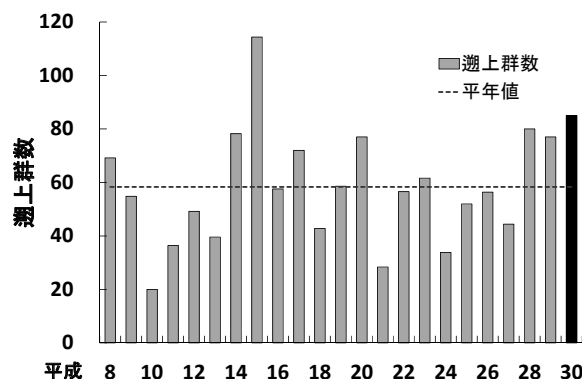


図3 換算遡上群数の年度別推移

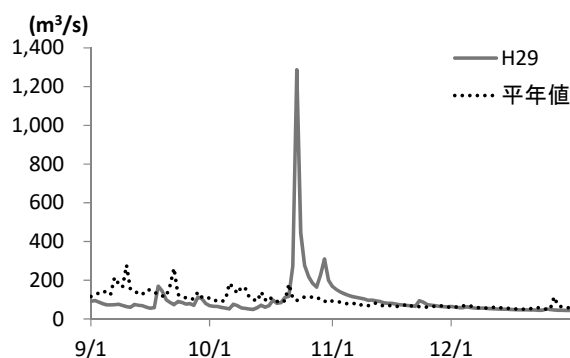


図4 那珂川野口における河川流量の推移

群数と正の相関関係が認められている10月から12月の河川総流量<sup>2)</sup>は $81.3 \times 10^6 \text{ m}^3$ で、平年( $65.1 \times 10^6 \text{ m}^3$ )より多かった。

那珂湊における海水温は12月から1月にかけて平年より高く推移した(図5)。遡上群数と正の相関関係

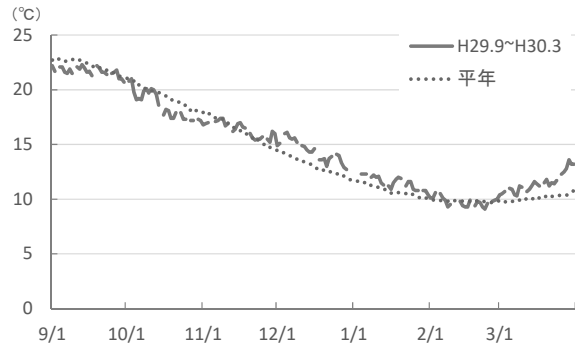


図5 平成28年9月から29年3月における那珂湊定置水温の推移

が認められている2月1日から3月20日までの積算海水温<sup>3)</sup>は494.3°Cで平年(474.2°C)を上回った。

今年度の遡上群数に影響を与える環境条件については前年秋の河川流量が平年を上回り、また海水温が平年より高く、遡上群数を増加させる条件が整っていた。今後も河川の環境要因と遡上群数の関連性を調査し、遡上に影響を与える要因を精査する必要がある。

**アユの放流状況** 今年度の放流量は14.7 tで、前年(12.8 t)の115%、平年(18.8 t)の78%だった(図6)。放流種苗の平均魚体重は14.2gで前年(11.6 g)より大

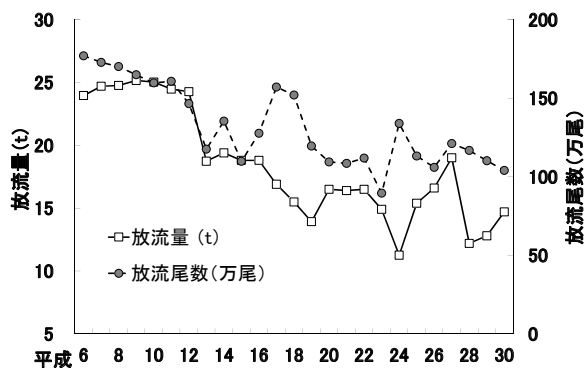


図6 種苗放流量および尾数の推移

型で、概ね平年並み(14.5 g)だった(図7)。放流尾数は104万尾で昨年度(110万尾)から6万尾減少し(図6)、平年(132万尾)より28万尾少なく、平年の78.8%だった。

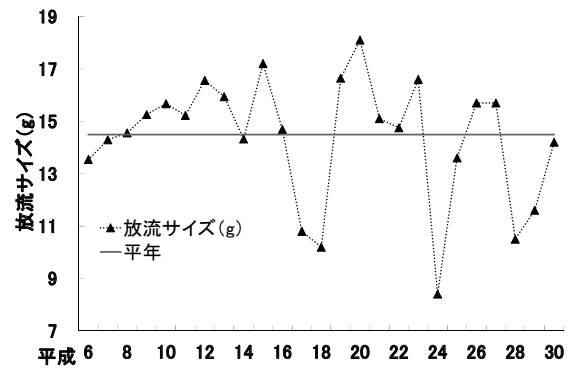


図7 種苗放流サイズの推移

#### 引用文献

- 1) 高木優也. 那珂川のアユで見られる遡上の遅れが釣れ具合に及ぼす影響. 栃木県水産試験場研究報告 2015; 58: 5-12.
- 2) 石嶋久男. 1976年からの那珂川におけるアユ資源調査とアユ資源量予測の可能性に関する考察. 栃木県水産試験場研究報告 2011; 54: 4-8.
- 3) 中村智幸, 糟谷浩一. 栃木県那珂川における両側回遊型アユの遡上日と遡上群数の予測. 日本水産学会誌 2004; 70: 288-296.

(指導環境室)